早瀬 響子
illustration
青海 信濃
劣情の獅子に
囚われて

劣情の獅子に囚われて

《立読み版》

早瀬　響子

イラスト　青海　信濃

1

「やっ、もう、やめっ、――ひあぁっ……！」

荒い息の中、何とか絞り出した黒川操（くろかわみさお）の哀願の声は、途中で悲鳴に変わってしまった。白い喉がひくりとのけぞる。身体を起こされ、向き合った姿勢で相手の膝の上に乗せられている格好だった。

「何を言っていやがる」

笑みを含んだ声が耳元で響く。声の主の獅子倉雄介（ししくらゆうすけ）が、操のほっそりとした華奢な身体を、その力強い両手で荒々しく掴（つか）み引き寄せたのだ。

その背には、刺青（いれずみ）があった。五色の瑞雲（ずいうん）とともに、衣をなびかせ空に舞う天女が見事に描かれている。ずっと続く行為のため彼の背もうっすらと上気し、天女はまるで、生きているかのような鮮やかさだった。

「あ、あっ……！」

雄介に引き寄せられたために、繋（つな）がっている部分が体内で大きく動き、猛（たけ）り立つ精悍（せいかん）な雄（ゆう）

根(こん)が、強く操の内部の肉襞(ひだ)を擦り上げる。
とたんに目もくらむような快感がこみ上げ、操は背骨が軋むほどにその背をしならせた。
もう一体どれくらいの間、雄介に嬲(なぶ)られ続け、何度いかされ続けているのか、操にはわからなくなっていた。何度も吐き出された粘液が、牡茎や繋がっている部分をぐっしょりと濡らして淫(みだ)らな音が響き、頬が染まった。肌は汗に濡れ、責め立てられ続けている腰は、まるで鉛のように重い。
なのに雄介に触れられている部分からは、快感が止めどなく沸き起こっている。彼は一度、自身が達した後も操を解放しようとはせず、繋がったまま荒々しく腰を動かし、操の身体を飽くことなく穿(うが)っているのだ。
さらに両方の胸の突起を、彼の両手の親指が捕らえ、押しつぶし、揉(も)みしだく。そうやって感じやすい部分を執拗(しつよう)に責め苛(さいな)まれていると、既に疲れ果てているはずなのに、それらの箇所から背骨を伝い、新たに熱さとともに痺(しび)れるような感覚が行き渡るのだ。その感覚に全身を支配され、身体がひどく重く、ものを考えることもできなくなっていた。十八年生きてきて、まさか自分がこんな目に遭わされるとは思ってもいなかった。自慰を知らないわけではないが、薬によって強いられた快感は、想像も出来ないほどに強かった。こんなに感じさせられ、息も絶え絶えになるまで男に犯し抜

かれるなんて、もちろん想像もしていなかった。
荒い息をつくその顔を覗(のぞ)き込んで、雄介が唇を歪(ゆが)める。
「こんなにぐしょぐしょにして、尖(とが)らせて、気持ちよがっているくせに、やめてほしいだと？　嘘をつくな」
「ち、違っ……！　も、どう、か……ゆる、し、――！」
それでも必死に再び絞り出した声は、途中で切れた。雄介の手が下に伸びて操の牡茎(おすくき)を掴み、軽く握り込んだのだ。それだけでいかされ続け、快楽を強いられ続けていた牡茎は、またあっさりと果ててしまった。
一瞬、昇天するような快感が全身を貫き、そのまま前にくずおれそうになる。が、彼の片手でその身体を支えられ、その感触にはっと我に返らされる。雄介は操の牡茎を嬲っていた手を自身の唇に持っていき、ぺろりと舐(な)めた。その手は、たった今操が新たに吐き出した体液でぐっしょりと濡れている。彼の瞳には微(かす)かな笑みが浮かんでいた。
「また、いったのか。淫らだな……」
操は真っ赤になった。自分の身体が、到底信じられない。今までほんの数回会っただけ、そしてろ

くに言葉を交わしたことさえないこの男に囚われてから、これまでしたこともない、どころか想像したことさえない行為と、感じたこともない快楽を強いられ続けている。今、操を支配している疲労も熱さも快感も、全ては触れ合うほどに間近にいる、八歳年上のこの男が与え続けているものだった。

「……」

もう身動きもできなくなって、支えられたまま、荒い息の中で彼を見つめる。かすんだ視界の中、彼の姿だけが見える。浅黒い肌と、強い顔の輪郭。やや張った顎。高い鷲鼻と引き締まった口元。その全てから強さとエネルギッシュな雰囲気が溢(あふ)れている男である。髪も瞳も漆黒で、特にその切れ長な瞳は鋭く強い光が宿り、その瞳に見つめられると、操は竦(すく)んで動けなくなるような感覚があった。まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

そして雄介の身体もまた、力に溢れていた。一八五センチを越える長身と、精悍な体格である。その身体でのしかかるようにして支えられ、強引に引き寄せられている。一七〇センチに満たないほっそりとした操の身体は、彼に抱え込まれ、完全に支配されているかのようだった。そして繋がった雄根は、操の身体では受け入れるのがぎりぎりいっぱいなほどに大きく力強く、まるで串刺しにするかのようにその身体を深々と貫いている。

それでも操の内壁の肉襞は、まるで絡みつくように密着して彼を受け入れている。行為の前に催淫(いん)剤をたっぷりと塗り込まれたためにひくひくと震え、蠢(うごめ)いて、絶えず新たな刺激を欲しがっていた。今も彼の雄根に密着しているために、その動きはおろか脈打ちまでが恐ろしくはっきりと伝わってくる。

その刺激が記憶を呼びさまし、目の前の雄介の顔に、ふいに従兄(いとこ)の面影が過(よ)ぎった。雄介よりさらに一つ上――九歳年の離れた、実の兄のように慕っていた男の顔が。

――義之(よしゆき)さん……――

彼の名を心で呼んだとたん、哀(かな)しみがこみ上げてきた。その想いがたちまち涙となって溢れた。

――どうして、こんなことになったんだろう……――

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

劣情の獅子に囚われて

《立読み版》

発行日　２０１１年７月２１日
著者名　早瀬　響子
イラスト　青海　信濃
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。